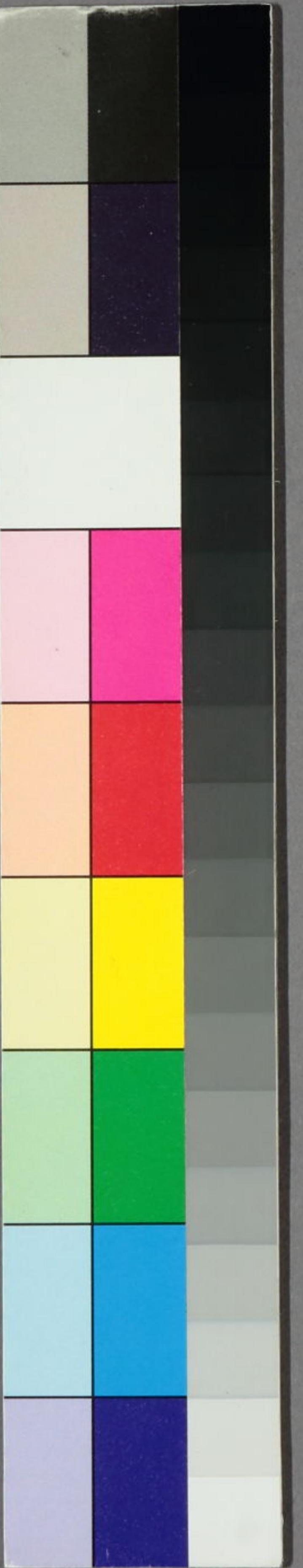


紫東姑加保羅

完



190 180 170 160 150 140 130 120 110 100 90 80 70 60 50 40 30 20 10 1

書道興歎懐望圖

壺中軒

遲日葦

追善

夜々庵

美濃

徐風葦正  
五竹菴撰

出雲

糸東下編

序詞

棄れたる興一絶をひらく人  
乃人へる所と云やうに雲州仁多郡  
大馬本なる魚沼東下子ヶ集落編  
其の絶えあるとあくすれどもあくす  
家系譜前へるよし地の形またりと  
父祖文書を行ふる塗紙石明といふも

先の物故あり生前風情に  
あつたる厚き風雅をもと  
此作は幼んと志願をありかくせば  
夙夜乃友稀す他邦を遠隔りくらひを  
とげらるゝとせんあるとく筆寫  
が里に留め候りかう私をきてま  
峰志士りよほ遠く用られ候されや  
主义の文豪公務に余力ハ風情

人和の石をぬく徐紹介吉門になん  
竹林のあきとう画と仰詔はれんと  
画をもと移地の風情寫りて  
美景乃風情をゆきめんと描摩詠や  
す聖乃むよ旅されしも源廣の詠  
詠を多めよ旅すあれをとくめてはま  
なきをせよ志めきりとなんおこ  
かけきの追悼の詩風せより送り筆

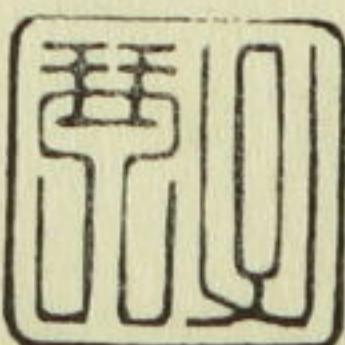
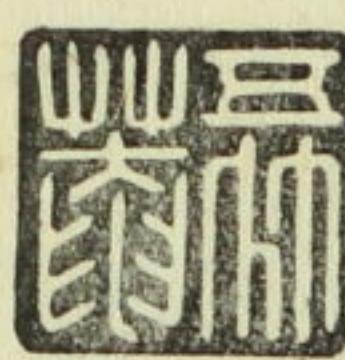
章句を蝶の夢と題す。す御内閣を  
け巻はかつてせのあくまにを残  
あくもこの作者の筆跡のまじんの  
を石略といつは以文便の家務事務所  
一傳承は夙雅をこの三日月の宿  
急場といふを守れおゆれねを拓き  
もう夙雅宿泊へとせ難波花街  
喰物と再和合され西原すもすもえ

か雲の志はく口記は夙庵をとぞあ  
乞ふ特すの爲めにいふよき世  
の様にうれぬ多や三人の主を  
全せ争ひ様あるのをせ他方のゆふ  
是がおうて滅後の卷考はせの信のあ  
る、靈魂など知らし様ハ珍りんや御と  
龜宮やと同善種合すく火とすを  
於こよ薰りて百千のきのむす御内閣

主あるす、誠意のあらむよ志をもすよ  
乞ひ辭すよ辞すよ、  
旅宿下に  
かづけゆ。

文政七甲申二月

五竹斎



義父壺中翁の事まめやえり／＼  
仰那吏の役を勤めりもせのすえ  
ちく磨業のめぐみをもふ／＼おと舞  
長吏の格が高めり／＼おと舞  
國君のめぐみなまうりまき／＼つま草の  
川すともとれま／＼甲豐も寛政十  
年の十月風子の嵩／＼を抱ふねま  
もみいとぬむ／＼となりてゑや二十  
六年の早春がまむねま／＼風移を  
ぬむむ／＼おと舞ま

宗子雪乃る夕もやひす赤色紫玉  
をぬくに月のあ覽と是等を  
れ初もをゆて思の造化の風月の  
えはなかつてもかはせのそよたどり  
ほす多あるがちりそをりその  
歌まとはなづめこと一美濃ナム  
五井菴師巻萬ねつま西湯をすま  
峰の故と社の法風士を詔さ  
追悔の法遂吟りにすむ世び  
あれされ行つま

場より多事の桂郎のあす御うわ

東下

方よりひ恩の乍別と高 東保  
子雀と空よおひまよ巢もみとく 五井名  
舟弓の所名れ御うりぐり 里へ  
日よくむ京居の酒よわ涼 一 芦洲  
宣下かくく任國の秋 緋川  
流継るよ赤例の神々人解して 美性  
古彦買ふかとよけあ橋絶 泣

孝経をさくろれんけよせす  
とゆくとゆくはるまの东风吹  
きのまわ花す御く海は國  
あらそくかづくの山訪化  
まくらぬ瀟の風雪れも便ひ  
まくら替てに改め以西  
出がはとおの里とめてあめます  
親よそむくすたり涙れ家  
白主 花亭 那太  
幽雅

破りあお松の比翼紋  
袴はははく式日め礼 松人  
育、月菊、翁、三才印配り  
浮あ梢紙かひい紙多 一枝  
所の園子室着墨衣 其明  
娘子絵と子すりうて刀を みへ  
咲ひよおの名からほ法比均  
二十五年も歎きの多  
門构

左経あり

祖又次文君周良多々あすり  
は日正福のよみを焼けくまゝの  
美松を吊ひたりて

廻れ汲思ふ向んまの多 本保  
久やたちをれ正福とくま  
あすりまきかま一せの思もと  
かり出でる

一二見揃も名もとむり む向葉 女 三三

叔父の追悼

ちくじと佐ノ田や壁邊邊り 本古

奈原壺中斬のあむー左せのひ  
と清よりて新ノをかすね  
不破偏てと一急の音流れず  
かまくら黄泉のあとなり既ひて  
もや廿五日もくはなりぬまよ

東下え人近善地宣を候す  
ううじよあひのとれ竹りて

ま雨やふまか一ほ葉乃ノ治

緑川

家書ありま

そみてなみもを御りくす急攝

一枝

次文終ひとま得國経の行い  
うすせのすえほろきりて  
情もあいのまことの歎

きみてむすき名めとくを  
ほひぬがくとくはふれら  
の苗ねをまひ嗣子東下のぬ  
追悼の志ああよりやもよ  
くよすかとくよみほ蓮  
はかり世の恩澤うす情  
と走りの

主魂と作くや月も光の上

芦洲

孝子系原氏東下子賢父乃

近頃ばかりアリ行進を圖る  
事すゆきのやうとくり  
あへにまがりて在せの國ヲ乃  
トカシナシ

陽光雨露皆可得  
場景

以文凡士之力在世ふを乞れの勅  
志けえ守よ夙夜の勤めよりて  
ゆきとトドリ義子お下せ人乃  
切操に通すをいとむと申すに

一章  
第一章  
第一章

卷之三

嗣子東下を人考ふのをゆのく  
賢文芭印をうけむじてとく日が  
まゆづら様子也福の形甚  
ひき四文のまく代邦のすまん人  
を抜いてもまのむか雲總をりく  
さめらうも見て

魂逐之而死也。——呂Π謂

臺中朝のめぐら忙温厚すとく  
あひき云勢の役を勤めずも元人を  
撫育へかねどり風船の御ミユ松を  
花鳥月雪の詠め自らのたほを寄れ  
いの波よも名を慕ふじいとがぬ  
ゆひな子を下らん御心の厚まつて  
あきりよは原の彦城僅か一ぢう  
めう種を集め残すすやもすすも  
翁修人をぢりて將あるぬるを  
念れ——さむ

湯をのじりやくよ名ハ清を 江柳

幻のせとく清にまひすせと乍  
をともかきと船へひ文便せよ  
在へ波を風船上船んとまき  
かまくのとやその年四と  
はすりぬる——義波なる升居  
師事うる處を當れをまし嗣子  
東下れぬ——孝心の深より近福  
のいふをまとい主教連をば

ひづれくよ生むの匂みよねさ

一章は靈あふ便く

猪もよけり

ちよびに鳥か若く 花の見頃

頑獅

四季

支人 壺中軒以久

翁やけきくは致らぬこそ

抱いせじくすまつは名すまうて

荒れよ葉日えと 牡丹  
ひられ孫をあそび歌く诵る  
文あやめ待たむれのぞまき

夜々庵石明三十三回忌追悼

支 石明

物へれあるはあれどもほんぢ

消えましめ名をよ十月 東下

舟のなみ門を経て橋ありす  
五糸庵  
積荷へりうす青替れ茅文三  
弓張引詠あらうる老の新竹柳  
立方子着きく汝送別れ笠東保  
浦城の田子川吉向の芙蓉屋芦洲  
堂の効化子麻糸す再建  
強引く酒すまよ二夕醉縁川  
彦之弔糸子歌と一玄里へ

嘆むよきよ琴彈く春宮中  
夷兵軍子か一神之房  
松破

太極手引一

夜く虎石門を齋居して公私  
用九無事候補て秋家子頑徒と様  
足立滑稽子志一寺主虎作  
たもりて又活文とあるすみめと我  
日本余がのくと發せん

生涯の如きアラシとアリ  
アリハサガ家のおとがわ  
は津毛トハタマテリぬあくあ  
ムニタタクシキハシムハシタ  
れ老ハ猪トナリ九牛ト一毛も報  
ひきとの歌トハタマテリ甚しき  
らモ雪魂工徒也

厚至恩之也向之焉  
乙未

東下

慈父夜々嘗て嘆息の如きをいた  
せしをよくぞ見聞しておる事へ  
さう三十三回れども未移り  
东下君近侍却ひまほん様へ  
秀むの如故風けありく

西家もおまかよゆの  
月のあ

文  
三

四季

古人  
夜と庵石明

お初夜はあともみ中より柳か  
新宿を戸にひきてよ墨をう那  
ゆふれさほの子鳥の別むや次  
ゆの道ハアはるをそめく老鳥

ゑく名はとし人の歌すみ  
所うちほくすくちあめの歌の聲  
せまなづの聲を詠うるをあくさん  
やけよと絶唱の聲をあくさん  
音のあゆすもまとて人をひくる  
秀々多うとやほほ悲悼の聲  
あくすく阿あくすくあくすく  
東下移の厚作すら詠ぬぞ集免  
今月卅日法事詠ひよ強くあふぞ  
靈魂の悦び持えがれすも得能よ

めうもねるよア  
おうわくよア

第一此後花也靜止時

芦洲

夜々、石ゆれぬと、あくびながら  
さう思ふ。おもて三十余年  
せむる。ゆきの底の底よぬ。かく  
ま記す。かくは、まくは、や  
行進とらのさよ。而と風雪  
一程かくせぬ。さりゆけたれ乃  
悲しきもゆき

志士也亦猶此耳  
若墨

綵川

石ゆき老いせよを第へと爲て  
けむよ風雅の株渠すりへるの  
やのよことのよもくを返  
乃風を吹すれどもよりその  
いふのとまことにやは清淨  
もの嘗あらず

言ふ葉の花を揚げゆるやく

九  
五

三十寺のむすび淨空のまことをかづけ  
おもてきをひくゆき生ある風雲の住處く  
再和氣く乃西行は會下み事  
名ふ三條の法あると頃湯まれ拂  
にきめくおもてせせんすれど我曹  
もゆきうすめられどの湯く  
アリキハ傳よけ叟の恩詔なれ危々ふ  
やは淨慈の牌あす

捨音百杵

やまきむくおもてせせんすれど

汀柳

近き葦のめ俗諺平絹の風雲  
おんぞん人をくくくく傳ふれど  
あそびき人をあそび老ふ色絹  
あそびてせま廣くまわくらす  
えふ等ふれてやうの者ほのあそ  
あそびりうりうりやま淨慈のいふ  
あらよ様もがくす

静き一せすすむの淨とあ

碩柳

香菴を絶へ靈位を嘗免せばなら  
ばのまゝよんじとちよ一章もるを

身向捨身九ねーく

三人の弟ふきや一からまつむ

五竹菴

古人之部

差かへさめようへなまくされこの  
がみをいはせ年一父母乃喪ノ  
あ寒ひにまわらむもそれハ順  
もよひなき一む一おと朋友れ

玄を珍んで手事の用を約せりよ  
かを切るのハ筋すく筋を轍  
せざりとなし五十全年の空虚  
も行くなりて筋に黄泉の下  
たゞりあに囚爲せよあわとす  
ひくことよしむなほれき  
云也とうのくらゐの

云也やあくと老のぬめりけ多  
多もすありそ

算税筆考

河井

まちあらはすの芥子の花 一柳  
亡路よ摘ひるむ 茶艸、ホウ山  
ぬれ神のあそりえや雨、ホウ山  
経夜よもがよるのな愁一、ホウ山  
橋の香やえひとくとも、ホウ山  
花なづて今ハ雨ヨコタ、ホウ山  
あーほんのうがや杜ヨコタ、ホウ山  
亡路や空すよ景あ稀雨あり、ホウ山  
席笑

大谷

豈急やよしよ写都立て時多 そふ  
亡跡やあくまじい 千日雨 カクイ  
晴ても甲斐あるさ芥子のせやうま、  
香の少すはあ波や夕日あ ハ代外牛  
今ハ入稀れきめりよまのに逃一 河井周  
もなさよあくなの夜の差 市 タヒ  
稀雨よとくめくみぬ神を喰う耶、  
乙鳥

歌

五月まのうか父魚坊の風支所

ヌヌガル逃れぬるあらゆ

種をもくはすや高きます。さへ

今市

生雲の国大なるに打ち不四のめ、  
風船のは鐵子てらあるとくさり  
を弦ひよかのとく風雪をのれ  
うえのきまわら船をくらべくま  
よみの雲が波よも高す外くま  
ひくもハキまやさなど消息あり

一ノ月の五日のはるかす  
ヤされまされせり。は。勝ひはすくも  
な。かげる。匂い。すに。ふき。す。な。ま  
あ。人。よ。み。お。せ。ふ。ろ。れ。行。感。す。わ。に  
あ。や。り。あ。り。い。う。な。き。ハ。去。年。の。あ。は  
急。坊。を。う。だ。ひ。こ。の。あ。そ。ひ。人。き。り  
ぬ。テ。多。ア。凶。速。の。な。り。次。ハ。我。タ  
れ。う。が。く。む。お。か。ひ。ほ。け。て。靈。あ。く  
か。く。ハ。傷。一。死。

おの隠。いはやれ夜の部。二

喜。莽

右ハ主に諸君子うちおかり奉れど  
皆の御意のあらうておどかの  
を出一ぬ

### 出席

多き一月、延暦の冬はもとと  
四季の顕解解りても尚す便

夕ゆ一時、之はおまえ耶

源氏

さきはぬ聖や一病の好色、

相敵

一雲のちぎれ動たり、烟三百、  
あまあれ中やむ先輩の日、幽雅  
志らの身の如くにゆきこ家下、  
紗衣や伸湯、  
川子風、  
日、  
園の奥ニ、  
山吹や  
清き流の水早、  
鴻羽

川を廻る流す常永、玉器  
故老の江戸にありて、多忙  
芭蕉の事は二年一月、みへ  
き急やまく事をあれど、松人  
あ鶴峰ほんありの賃戸、纏用  
のとくさやかひそのり。お懐ミニタ  
門の肩掛てり。乙未の節、  
秀範く朱ふけや。未の日、一枚

芦洲アシマツ 蓝水ミズ

山中やもよもあいのよい流太翁  
あら壁よ陽ル 暖拂ルホ 文三  
景カク 持をへちあ櫻ル、正永  
右の世を室子立ル、東保  
うるにやうる一部ハ、裏の名カタナ  
夜のゆて持すル、因面ル、五竹菴

文通名録

鶴や未の日持れ御代名

傷寒圖ケンセン 松雨

色の多うちもるくのあやけ  
急教やこよみよくあ井の垣  
水をかねて水うきがぬれむのを  
菜のもせ渡てあれやせむる、  
長く子よまめあれりうれ布  
新井の踏石カモ月ぬけ  
毛體ミトヤよ花の雪ホウやあハセ  
まきはよは名流ミツヨとてこの川  
多  
松江

花のよみゆく紙シテくすくす  
印ヨリをうめほりのよみ下シテ  
まくの苍アキよめつてうめせしアキき  
名れや名ヨリをあし海ノ房ボウ  
川中よ河カワのよみ下シテ、  
泥モ隠カモをよいかカモ蓮ハスのを、  
詠ヒメあまく山サンをひきり、  
散ハラいの小コトよあまむ聲ヒメ、  
一イチか

已今や、あれより移りて移りあひ  
葉根すいよくさのとある處の那、ヨタ  
藻入一花壁の跡アモ、花解  
みきの減りゆく川のめぐれ哉、二萬  
ま柳 やまふ利まれば春堂、化粧  
祖ニ腰うり引ひらぬの紙、朝四  
掃きぬ高きをまし梅の花、花解  
室内の宿を捨てた花アリ、芦葦  
千柳

初解や雲の消りあひ  
蘆れものあひなみゆき出かド  
桂の葉は高き音や音の高タ大谷  
一ノ名ニ望アリムの絶子、蘭香  
雪解や雪なま川よもよ音、壹侯  
音度よ石する音や秋の音、士院  
歌うやあ風す踊るやゑの月カヌタ柳伍  
夕氣ハ空よすあやれゆ  
立原 研月  
固有

古人歌

雪おもひやなき落のあれ光  
令市  
作のよやゆき鳥の親あれ、  
己鳥  
落おまてにゆるあくめま田畠  
ヨコタ  
内よみてはゆぬあくめま月  
宿田  
鳥のゆふは候名あうす  
見山  
鳥名

蝶み夢

追悼

鶴鷺飛ひまやいとすてゆの若  
さりやすくか都のよきゆにて月入  
射ちや一とくやのるとハムサ徐行  
け道をなん乍を七十里れ旅中は多く  
足と生れすとぞもてかくと年  
日は多くともかく阿久多山ふそれ  
多は大金ののもとすとぞ

かうきハあされまくらすやく  
かりて重れゑをもあうまめうひり  
母乃ち縫をす体をあうために掌  
中の縫たむれをいれきハがみ縫よハ  
詠きん掌縫かうるの縫も生のあり  
立きてゆきよの縫あみ縫そざる  
せなまく縫の縫すこ差のうちにもかく  
まく有けり

ノ

本文

ちうきあもじゆうて源廣の石

馬坊

肩連のまことかくも堅とすり

修れゆく元のかくしの年 石明  
源の能く凡がとうか 东下  
左あ荒せぬよ廊へ汚れく 何を  
ぬくを珍つ神乃縫口 洞寺  
村雨そねよ縫取ふ壁あうと 乃因  
牆に金縫の壁あうと 常考  
ほえみ縫も桶く日の射 草肥

右十句表

續正考記

まく 余生もくめにの店の緒引  
才子がぬけをのすや生貨志用詫みて  
ゆけふきより猪子門の風船をまくひ陽  
つ老人をなすれて此一筋の細をだりせ  
法として御造たるとをされどよりあまき  
あまきりわの画よりくわくまく  
まくまく しま頻よ吉野の花とひ  
立絶はれむのをもひやとひそそめて

衣更着せぬ、かくも、雪のあつた敵の川  
のやうりを立て、よき摺磨の尾上  
もみがまとなかへゆり。捺取の庫  
みはを立て、旅籠の宿泊をあ  
よ一泊のかつま。一月九日のお  
みめ記など、想めやうて、彼育お撫、  
枝葉くむけけと、蓋され下れよ。ま  
書へきと、やがて、一月の暮、清き  
なまく一字を、あくへおひそみあく  
をうそ竹の男もあへてさわきて

今抱一氣とすかうり物をひいきに  
息絶するやうやなまく紙音

速りぬえとまを迅速ひきひき

かわざるきとのあるゆきよどぎよ  
あれゆくとまなばせきぞれもあ

せうきの紀

あれもや解けほのさそりう  
と後流れ云極みまのえあと  
なうねうれ流はくのねとけの解  
を見る一氣とまを説くあといふや

今もかなつきやにまとめゆらぬ  
須ノ浦ハシモ旅めうんき風あまへ  
まの解くて一時の令はまかくへまをや  
歎ひ御サキといふ新短命なんと  
あやさすもあらもとどひわい我  
古ノとがうを家のうぐりよ一族れ樹を  
持よやまとひくわいひむける李れ、寂  
ようひて彼北場玉豆のひくわいふ  
わいふや持かずさゆまだもんがま  
旅守まひだをもむくらする者世の因縁

あやかひ落す死すふあらうはすまう  
老る母のうゑをうへさせられがすひ  
を御いまなれとや風ハ吹ぬるを

死よとくわや死ま死七十里

石明

生日落れあり従翁活生勧め吉野の  
花まとさひ出でまつてこゆけり賀茂  
きもぬきあらす芦のかう毒れ苦よ拂ひ  
あへに水ゆううゆういのる病がる  
やちむんとけてやめやうにその記

ひと酒飲るとぞ失されまをよみまう  
醉ゑるゑく鳥絶飲るよくをむ  
車一光院れんがまこととくとけ御せ  
弟の志元よやうと月とまくゑ  
きる煙させをぬいてはれのなまくよ  
よみゆくに萬寛厚うておとの  
人情を知らぬよひ生あれま桂昌院  
かく一章あもすて脚す枝をよ  
されそはくとよりぬみけくとせ  
なれを月をすき福れ法蓮を催

一章の毛穴は名古屋  
佛のあらわしひとたの見  
ぬ又子よアホい

乃又子子也猶以

元治丸が見ゆるのあはれ

附錄

湯生ゆすら  
松林のゆるさ 大東の歌  
すらりとやわらかよおもしりめふ  
比類やうし人のわくわくとるるのせ  
よかわえてあくよもじをひくえ  
たるゑの浦ゆすらかすかよ

こはいとむろみ

於あくまでに曉ゆる カミタマア 草肥

おまつまわる

卷之三

ちくじいみゆきせよあめのめき、  
行處  
なまきすまうまきこへゆのむかひくらる、洞寺  
おみの旅先へぢりり人あまれ大若、  
沙國  
さほもい洞の雨とましれわせ、夢を

はまゆるやあらかじめのあをき  
ひさんやれ蒼のむす慶耶荒、通示  
雨あつておもふ橋のほどの雨 桥一  
きよし道伝萬種よわれの船 一岐通  
をくまゆひりふせぬ名あけ、  
君のまづみれはまくらふ ヨコタ万三  
えふかく蒼のむれぬ向う耶、通仙  
ちと紗やははははのむみる、泉志

すもあられもよしそくちよくと、寄写  
あやかくそみてわらやぢぢ橋 ミトヤ 魯川  
きくわいもあきまくらる氣、す松  
永きのじく連日せきとくと、牧牛  
あくまく先づて左のりきうれ、東門  
あひとせやむじくとく鳥啼、長浦  
西の夜と月と雪と雪と月 キニシ 松山  
雨やいよ候居るものあすは、け橋

むづくと旅の宿

四

春琴

まよ多くて夢すやうはあまくは雲  
流れぬのたゞさりもいつあり  
車多す街角、旅泊はその駄屋  
あらば旅館よりの費用もあれど  
おわらの身、けよるかの身など  
やりのとて描てこそやまとては  
せ國なりか、廻りゆす西を旅居して  
つとめてのあみ旅さんとやらに何  
れをやめゆるかの身のものをね

ゆく息ぬゆとはひそく人とせ  
ろきさりけどもゆきアソハリ皆  
此時りんさくはあくまとなみ  
あくまと生體がハ様をもめて是西  
おわざめかへいきさきゆゆゆ  
ゆきせせむのゆきすよせんとゆ  
乃さやくもれはまちゆきがす唐  
生をいたるあむ唐豆て木を實ひ  
けむるをくじとせせむて不のれ  
ゆりやゆくまをさるをひみす

行ふとぞれにまこと亭を参へ  
がゑ歌ひはんなく拘ゆ  
なきからや何事の夢か

金  
帝

あまおとす  
ゆめうえりあれあう節  
伊勢國  
松  
和

徐幼元之子將生年以爲下十風後  
志歸之曰吾吉歸乃心不殆也

おひへえて播磨はの國の南に  
ちく玄摩が驛 こまへりもせよ  
カタツムリは国までまき人  
お歎言多ハ故ゆのせうのむかし  
いゝやがれんまゐ不ぬみと  
すりゆのそよりもくへすま  
將のあらわをやうむ

物をうそばかり  
世のふしきをまみる  
月の星

李  
昇

名詠

越外のらむすり一宿され  
東雲や鳥す一あすく宿  
いはきくら金ゆくとまくす  
里泊又ゆけいつ田みう南  
宿され身すげれきを要ひ  
軸立を左ふ嘆あく独活草  
搖るみおきせよ一女七夕  
洞季 乃周

麦初うそつけれて桃の花  
峯の香やじの峰ともあがへ  
菜籠す瓢うちとやちりぬる  
花びらふ鶴かねむ牡丹小  
さくははくねえてもほの鳴  
長浦 久文 石明

黒う代や山のうすよ

菜籠烟

鶴庵

四季

古人 連り庵 繪行

はな長ひ草を刈りたりましれ  
雨  
考へ勤のつみ涼すうりあやめ子  
砂きり  
秋のそよりをばせり  
焚ほとは焚ても落の花あふれ

医日菴 繪行  
亡父以文う吉市に  
一もあきどり書画をぬが乃  
あやうす聞く仰徳徳の医学がち  
たく文部の英才を人を賞  
合ふたりやうと努力とありて  
石川の故も乃記すあれゆくめ  
てうかうやうれ跡よとなりゆる  
うその代に家業はありて膠漆の  
國をつく業を成してまわうて既  
而琴の音ひかきうなづひよけ家

れぬよとゆきよとゆきよとゆき  
旅の魂をともひといづれ幻の夢  
らまんやまんは追憶の夢もあり  
一をもひ五升ばかり雷舟をもとも  
一冊子といすむる場ハ佛山の林下に  
ありてりに云ふああ絶景ノ美  
金杯もよそひきせん記念  
とくぢりほりぬ

今もこれ極手珍りじ多悲一

東下

阿ソリケ冊子なぞりとくあや  
なる消息といひゆく

三書きのさせをあれ

あおきや

なまき人へくの

むかう説

徐風斎

蕉門書林

皇都寺町通二條  
橋屋治兵衛梓

